

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：80101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370816

研究課題名(和文) 北海道内に所在する北海道外関係の近世武家文書に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental study on the early modern samurai documents of Hokkaido outside relation located in Hokkaido

研究代表者

三浦 泰之 (MIURA, Yasuyuki)

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号：50300843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：北海道内には、近代以降の北海道移住によって、北海道内に持ち込まれた近世武家文書(道外文書)が少なからず存在している。本研究では、そのような「道外文書」の所在調査と、内容的な特徴の把握を進めた。そして、ほぼ全ての文書群に知行宛行状や武芸免許状など、武士としての由緒を物語る古文書が含まれていること(逆に、それに特化している場合も多いこと)を確認した。このことは、かつての武士たちが、北海道移住の際、武士としての誇りや由緒を「古文書」の形で「持参」してきたことを示している。また、このような「道外文書」は、道外の関係地域において、存在すら知られていない場合が多く、情報発信が急務であることも確認した。

研究成果の概要(英文)： In Hokkaido, early modern samurai documents ("Dougai Documents") brought into Hokkaido by immigration to Hokkaido since the modern era have existed to a large extent. In this research, I proceeded to investigate the location of such "Dougai Documents" and consider the content features of each. So, I confirmed that almost all the document groups include ancient documents that show the history as samurai, such as "Chigou-Ategai-jou" or "Bugei-Menkyo-jou (Swordsmanship license)" (in many cases, it is often specialized on they) did. This shows that when former samurai emigrated to Hokkaido, they "brought" pride and lineage as samurai in the form of "ancient documents".

In addition, such "Dougai Documents" are often not known even in the related areas of Japan (Honshu), and I also confirmed that information dissemination is urgent.

研究分野：日本近世史・北海道文化史

キーワード：日本史 近世武家文書 北海道移住 近世史料論

1. 研究開始当初の背景

研究代表者が勤務する北海道博物館が所蔵する文書資料には、北海道の歴史と直接関わりのない内容をもつ近世武家文書が含まれている。例えば、明治初期に屯田兵として北海道へ移住した旧小城鍋島藩土の子孫から寄贈された、龍造寺家や鍋島家から発給された知行宛行状を含む文書群、明治初期に家臣団で移住してきた旧仙台藩白石領の陪臣の子孫から寄贈された、伊達政宗の黒印状を含む文書群、などが挙げられる。

また、職務上、道内の市町村教育委員会等から文書資料の保管や整理に関わる相談を受け、やはり、北海道の歴史とは直接関わりのない内容をもつ近世武家文書の所在情報に接することもあった。例えば、札幌市の近郊、南幌町の郷土史研究会が保管する板垣家文書は、明治20年代に三重県から農民団体を率いて南幌町域へ移住してきた旧藤堂津土板垣家に伝来した1,000件を超える文書群であるが、江戸中屋敷の留守居役などを務めた板垣家の役務に関わって、藩主の行列次第書など、藤堂藩の藩政についての文書が含まれている。

このような北海道内に所在する北海道外関係の近世武家文書(以下、「道外文書」と略称)は、北海道の歴史を研究するという観点では、研究対象にはなり得ない内容の資料と言える。しかし、上述した板垣家文書の整理に平成22年度から関わる中で、三重県史編さんグループや伊賀市史編さん委員会等、藤堂藩関係の研究者に対して予備調査的に情報提供を行ったところ、藤堂藩関係の文書の多くは空襲で焼けて残存が少なく、貴重な史料となる可能性が高い、という示唆を得た。そして、「道外文書」は、未発見の文書も含めて、本州以南の地域を対象とする研究者等にとって、その存在が知られていないだけで、その地域の史的な欠落を補う重要な史料となり得るのではないかと考えるに至った。

加えて、「道外文書」は、近代以降の北海道移住、それも、土族救済を目的として明治30年代までに政策的に推し進められた「土族移住」に伴い、北海道へもたらされた文書群であることが想定される。文書も「移住」し、子孫へと伝わるという現象には、文書に対する移住者の特別な意識が働いている可能性が高いと考えられる。このことから、「道外文書」の状況を総体的に分析することは、近世文書の歴史的な伝来や管理とその社会的な意義を研究対象とする近世史料論、特に武家の史料論に対して、新たな論点を提供し得るのではないかと考えた。あわせて、武家の由緒論に対しても、近代以降の展開を加味した新たな論点を提供し得るのではないかと考えた。

以上が、本研究課題を着想した背景である。

2. 研究の目的

本研究では、第一に、北海道内に所在する

北海道外関係の近世武家文書(「道外文書」)の所在調査と個々の文書群の構造分析から、その全体像を把握すること(個々の文書群全体の解題的な概目録の作成と、その中の近世文書1点1点の資料リストの作成等)を目的とした。

そして、第二に、そうした文書がなぜ北海道へ「移住」し伝来してきたのかという点に注目して、「北海道移住」という視点を加味した、「道外文書」をめぐる新たな近世武家史料論を提示することも目的とした。

加えて、第三に、以上の作業より得られた成果を、文書の内容と深く関わる本州以南の地域にある資料保存・公開機関等へ還元し、活用を喚起することも目的とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究で対象としたのは、北海道内に所在する北海道外関係の近世武家文書(「道外文書」)である。研究代表者の勤務する北海道博物館の所蔵資料など、研究開始以前から所在を確認していた「道外文書」に加えて、いまだ未発見の「道外文書」の存在も想定された。

よって、研究の方法としては、既に所在を把握していた「道外文書」の調査(個々の文書群全体の解題的な概目録の作成と、その中の近世文書1点1点の資料リストの作成等)と分析を進める作業と、新たな「道外文書」の所在調査を進める作業、新規に所在を確認した「道外文書」について、道内を「道央」「道南」「道北」「道東」の4つのブロックに分け、年度ごとに調査を行う作業、を並行して計画的に行い、「道外文書」の全体像の把握と分析を進めた。

(2) 「道外文書」の内容は、直接的に北海道史に関わるものではなく、北海道へ移住して来たかつての武士の郷里である、本州以南の地域の歴史に関わるものが大部分を占めている。ただ、「道外文書」は、その所在すら、それぞれの地域を調査研究対象とする資料保存・公開機関等には、ほとんど知られていないという状況にあった。そこで、「道外文書」の内容と深く関わる地域の資料保存・公開機関等と意見交換するとともに、積極的な情報発信に努めることとした。

4. 研究成果

(1) まず最初に、本研究を通じて調査を実施した、主な「道外文書」について、その概要を示すと、以下の通りである。

北海道博物館所蔵

・斉藤家(安齋家)文書

明治4年(1871)に旧仙台藩白石領片倉家の家臣団の団体移住として現在の札幌市白石区へ移住した旧仙台藩陪臣の文書群。

・井深家文書

明治7年(1874)に斗南藩経由で北海道へ移住した旧会津藩土の文書群。

・植松家文書

明治 23 年(1890)に水害のために現在の樺戸郡新十津川町へ移住した旧大和国十津川郷土の文書群。

・水町家文書

明治 18 年(1885)に屯田兵として江別兵村へ移住した旧小城鍋島藩士の文書群。

個人蔵(江別市)

・前原家文書

明治 18 年(1885)に屯田兵として江別兵村へ移住した旧鳥取藩士の文書群。

個人蔵(江別市)

・吉原家文書

明治 18 年(1885)に屯田兵として野幌兵村へ移住した旧小城鍋島藩士の文書群。

北海道立文書館所蔵

・藤田家文書

明治 4 年(1871)に旧仙台藩白石領片倉家の家臣団の団体移住として現在の札幌市白石区へ移住した旧仙台藩陪臣の文書群。

南幌町郷土史研究会所蔵

・板垣家文書

明治 26 年(1893)から現在の空知郡南幌町三重地区へ移住した三重団体を率いた旧藤堂藩士の文書群。

登別市郷土資料館

・須田家文書・黒澤家文書・日野家文書

明治 3 年(1870)に旧仙台藩白石領片倉家の家臣団の団体移住として現在の登別市へ移住した旧仙台藩陪臣の文書群。

市立室蘭図書館所蔵

・添田家文書

明治 3 年(1870)に旧仙台藩角田領石川家の家臣団の団体移住として現在の室蘭市へ移住した旧仙台藩陪臣の文書群。

伊達市開拓記念館所蔵

・亘理伊達家文書

明治 3 年(1870)から家臣団とともに現在の伊達市で開拓に携わった旧仙台藩亘理領主伊達家の文書群(佐々木馨監修『伊達市開拓記念館所蔵亘理伊達家史料』伊達市開拓記念館、2011 年)。

伊達市大雄寺所蔵

・羽田家文書・加藤家文書・二階堂家文書・村木家文書・半沢家文書

明治 3 年(1870)に旧仙台藩亘理領伊達家の家臣団の団体移住として現在の伊達市へ移住した旧仙台藩陪臣の文書群(亘理伊達家文書調査研究会編『北海道伊達市大雄寺所蔵亘理伊達家中諸家文書目録』亘理伊達家文書調査研究会、2014 年)。

釧路市鳥取神社所蔵

・美田家文書・津阪家文書・野村家文書

明治 10 年代後半に現在の釧路市へ移住した旧鳥取藩士の文書群(高嶋弘志「『伊賀越の仇討』と美田(渡辺)家 釧路鳥取神社所蔵『美田家文書』をめぐって』『釧路公立大学紀要 人文・自然科学研究』第 2 号、1990 年)。

厚岸町海事記念館所蔵

・土生家文書

明治 23 年(1890)に屯田兵として太田兵村へ移住した旧加賀藩士の文書群。

個人蔵(厚岸町)

・友田家文書

明治 23 年(1890)に屯田兵として太田兵村へ移住した旧加賀藩士の文書群。

個人蔵(厚岸町) / 北海道立文書館寄託

・本庄家文書

明治 23 年(1890)に屯田兵として太田兵村へ移住した旧米沢藩鮎貝御役屋将・本庄家の文書群(高嶋弘志「厚岸本庄家文書の紹介」『釧路公立大学紀要 人文・自然科学研究』第 5 号、1993 年)。

個人蔵(厚岸町)

・柿崎家文書

明治 23 年(1890)に屯田兵として太田兵村へ移住した旧米沢藩士の文書群(高嶋弘志「厚岸柿崎家文書の紹介」『釧路公立大学紀要 人文・自然科学研究』第 4 号、1992 年)。

(2) 次に、上記の文書群から、具体的に 2 つの文書群について例示する。

板垣家文書(南幌町郷土史研究会所蔵)

明治 26 年(1893)から現在の空知郡南幌町三重地区へ移住した三重団体のリーダー的な役割を果たした旧藤堂藩士の板垣賛夫にゆかりの文書群。板垣家は 500 石取り程度で、賛夫の父・魁蔵や、その先代の彦左衛門は、藤堂藩の江戸中屋敷の留守居役など、重要な役職に就いていたことが知られる。

板垣家文書の総点数は、1,548 点で、その内、武芸免許状や幕末期の藤堂藩主の行列次第書など、年代が明らかな近世文書は 139 点含まれている。

また、板垣家文書の特徴として、板垣家と同じく、500 石取り程度の藤堂藩士であった森川家にゆかりの文書群が混入していることも挙げられる。板垣賛夫の次男・殖が、賛夫よりも先に北海道の現在の月形町へ移住していた森川繩の養子となったことで、板垣家と森川家の文書が一つにまとまったのではないかと考えられる。北海道移住後に同郷同士で結ばれた姻戚関係による文書群のまとまりというあり方は、板垣家文書に限らず、北海道博物館所蔵の井深家文書など、その他の文書群でも見られる特徴である。

斉藤家(安斎家)文書(北海道博物館所蔵)
明治4年(1871)に旧仙台藩白石領片倉家の家臣団の団体移住として現在の札幌市白石区へ移住した旧仙台藩陪臣・安斎家の文書群。安斎家は、代々、仙台藩の重臣で仙台藩白石領主・片倉家の家臣であったが、明治維新の際、戊辰戦争で仙台藩が新政府軍に敗れて、大幅に領地を減らされると、その他の片倉家の家臣とともに、北海道への移住を余儀なくされた。

斉藤家(安斎家)文書の総点数は、434点で、その内、慶長期の伊達政宗からの黒印状(伊達政宗の重臣であった片倉景綱と、安斎家の初代満右衛門は、天正4年(1576)に君臣の契りを交わしているが、その後、満右衛門は政宗から領内の金山の管理を任されている)や知行宛行状など、年代が明らかな近世文書は64点含まれている。

(3) 以上をふまえて、「道外文書」の特徴についてまとめると、以下の通りである。

まず、重要な特徴として、ほとんどの文書群に、代々その家が仕えた主君からの書状や印判状、知行宛行状、もしくは剣術や槍術、馬術といった武芸の免許状が含まれていることが挙げられる。つまり、武士としての「由緒」を示すような文書の存在である。中には、それに特化した文書群もあった。

このことは、例えば、具体例として挙げた安斎家の場合でいえば、戦国時代以来の武士としての由緒を証明してくれる大切な“古文書”を持参して北海道へ移住してきたという行為の表れである。つまり、「先祖代々の土地を離れ、北海道への移住を余儀なくされたが、自らの家は、戦国時代から片倉家に仕えてきた由緒ある武士の家柄なのだ」という想い、つまりは、自らの「由緒」に対する誇りを移住先でも失わずに保ち続けていくという決意を、“古文書”というモノに託したと言える。

このように考えると、「道外文書」は、内容的には北海道の歴史を直接的に物語るものではないが、その存在そのものが北海道移住の歴史や移住者の心情を雄弁に物語っていると考えられるのである。

現在も個人蔵として「道外文書」が大切に保管されている家があり、また、伊達市大雄寺や釧路市鳥取神社のように移住団体の精神的な紐帯として機能してきた寺社に寄贈される形で残っている場合もあるなど、移住当時の面影が色濃く残っている一方で、代替わりによって、移住当時には「道外文書」に対して込められていた想いが薄れてしまい、既に散逸してしまったものも多数あることも想定される。このような「道外文書」の伝来状況そのものも、移住者とその家の由緒をめぐる近代史と密接に結びついている。

また、例えば、三重県総合博物館や三重県史編さんグループ、東北大学東北アジア研究

センター上廣歴史資料学研究部門、佐賀県立図書館といった「道外文書」にゆかりの本州以南の地域の機関などと意見交換を行った結果、「道外文書」は本州以南までその存在が知られていないだけで、ゆかりの地域の歴史にとっても貴重な内容を含む文書が多く含まれていることを改めて認識した。「道外文書」についての、所在調査を含めた、さらなる調査研究と、情報発信は、今後とも継続して取り組むべき重要な課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔図書〕(計2件)

北海道史研究協議会編、北海道出版企画センター、北海道史事典、2016年、548

北海道博物館協会学芸職員部会編、寿郎社、北の学芸員とっておきの お宝ばなし 北海道で残したいモノ 伝えたいコト、2016年、343

〔その他〕

ホームページ

・地域に残る北海道移住の「記憶」：空知郡南幌町の事例から(北海道博物館協会学芸職員部会ホームページにおける連載企画、コラムリレー「伝えたい地域の遺産」の第14回)、2015年

<http://www.hk-curators.jp/archives/2509>

・元新選組副長助勤・永倉新八にゆかりの資料(北海道博物館協会学芸職員部会ホームページにおける連載企画、コラムリレー「秘蔵品のモノ語り」の第10回)、2014年

<http://www.hk-curators.jp/archives/1817>

・北海道へ“移住”してきた“古文書”が語ること(北海道博物館協会学芸職員部会ホームページにおける連載企画、コラムリレー「北海道で残したいモノ、伝えたいコト」の第52回、2013年

<http://www.hk-curators.jp/archives/1661>

展示会の実施

・北海道博物館総合展示第1テーマ・クローズアップ展示「北海道へ移住した武士が伝えた古文書」の開催、2016年1月30日(土)～4月3日(日)

展示協力

・南幌町生涯学習センター郷土資料室の「板垣家文書展示コーナー」の展示替え(年2回)、2016年度

・南幌町生涯学習センター郷土資料室の「板垣家文書展示コーナー」の新設と展示替え、2015年度

招待講演

・明治維新と北海道～蝦夷地から北海道へ～、
2016年10月7日(金)、いしかり市民カレッジ主催

・北海道開拓と土族移住、2016年9月17日
(土)、東北大学東北アジア研究センター上廣
歴史資料学研究部門・岩出山古文書を読む会
主催

・板垣家文書から迫る入植当時の南幌の様子、
2016年8月25日(木)、南幌町教育委員会主
催

・北海道の古文書あれこれ 北海道博物館所
蔵資料を中心に、2016年2月27日(日)、
登別市教育委員会主催

・北海道開拓と移住者の生活文化 由緒を中
心に、2015年12月15日(火)、北海道大学
大学院農学研究院主催

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 泰之 (MIURA, Yasuyuki)

北海道博物館・研究部・学芸員

研究者番号： 50300843